

遠藤周作『白い人』論

——〈悪〉の存在証明と絶対への志向性——

古 浦 修 子

一、行為者としての「私」の自己認識

遠藤周作は、一九五三年に約二年半のフランス留学から帰国し、翌一九五四年に最初の小説『アデンまで』を発表した。『白い人』はその後、「近代文学」一九五五年五月号、六月号に発表され、同年、第三十三回芥川賞を受賞した作品である。留学以前から、評論を通して一神論と汎神論の対立のテーマに取り組んでいた遠藤は、日本的な感性と西洋におけるキリスト教との距離感を認識した自身が小説を通して企図するもの、作家としての姿勢について繰り返し語っており、その一つが芥川賞受賞の「感想」である。

作品の第一行にジャック・モンジュ^マという外国人の名を書きつけました。すると、この名の背後に神と悪魔、神と人間、善と悪、肉體と靈、それらすべての血なまぐさい戦いを描けるような気がしました。けれども私はジャックではない。白人ではない。(略)それ故私は再び、日本人の名をそこに書きました。すると、突然その黄ばんだ顔には劇^{ドラマ}がなくなつてしまつたのです。作家として私はこの點に非常に苦しみました。(1)

主要な作中人物がみな白人であり、基督教的世界を舞台としながら、彼らを相対化する『白い人』というタイトルを

冠したこの作品は、基督教を精神的土壌として所有し、神の肯定・否定に関わらずその存在そのものが問題となり対峙せざるを得ない〈白〉の世界への距離感を内包している。この点は、「無神論」を標榜する反面、神や基督を意識せずにはいられない主人公「私」の心性が、「自分の快楽しか顧みぬ」放蕩者の父と「父にたいする反動から」「きびしい禁慾主義を押しつけた」(一)清教徒の母のもとで育ち、肉と霊の間で引き裂かれてきたことに起因するものと考えられることから明らかである。この作品は「私」が〈悪〉の形成過程を回想し書き記した「記録」によって構成されるものであり、〈悪〉への衝動の烈しさを強調すればするほど、〈白い人〉として神への志向性を内在させながらそこに生きることができない人間の葛藤の「劇」を際立たせるものとなっている。つまり、『白い人』は、神への無意識の希求を認識できず佇立するしかない「私」と、その「劇」との距離を実感する一方で凝視しつくそうとする作者遠藤の二重の葛藤が託されており、神の前における人間の真に迫ることを試みた作品であると言える。

しかし先行研究では、「私」の認識と神との関係性については、「悪魔の子と自ら信じている、この主人公が、結局神の大きな掌の外に逸脱しえない」(笹渕友一氏⁽²⁾)、「論理的尺度をもつてすればすべて無意味と化してしまわざるをえない非論理的存在というものをそこに開示する」(武田友寿氏⁽³⁾)など、「私」の意志を超えた神の顕現を前景化する形で指摘されてきた。確かに「私」の〈悪〉の行為は神の恩寵の否認に基づくものであるとしても、〈悪〉によって真実に迫ろうとする「私」が不変のものに対する慾求を内包している点においては、神の存在を抜きにしては成立し得ないものと言える。ただし、この作品が「私」によって綴られた記録であることを考慮すると、例えば、三木サニア氏が

即ち「私」のサディズムは元来母親の純潔主義から発するものであり、ひいては神学生ジャックの「英雄主義への憧れ、自己犠牲の陶醉」に対し、その幻影を破壊しようとする「悪への意志」に促されたものでもあった。⁽⁴⁾と指摘するように、〈悪〉の行為が幻影に陶醉する者たちに抵抗し、人間の真実の姿を剥き出しにするためのものと

して意味づけられる点と、そこに拘泥する「私」のありようを重視すべきであろう。つまり、宗教的陶醉への嫌悪からくる幻影の破壊とは、「悪への意志」という形を取りながら、人間の真における、幻影の対極にある絶対者への切なる呼びかけを潜ませた行為であり、まずは行為者たる「私」像に注目しなければならない。さらに言えば、この作品は、〈悪〉の行為による真実の追求とそれを記録する意志を軸に構成することによって、「私」の内奥における神への希求を浮かび上がらせるものである。すなわち、作品を具体的に読み解く視点においては、「私」の〈悪〉の衝動の対極に顕現する神の存在を先立てる解釈よりも、「私」の行為が「私」自身においてどのように意図され認識されているかを確認することが要請されていると言えよう。

これらの点を踏まえると、「私」の〈悪〉の行為について考察するうえで、その目覚めの契機が、女中イボンヌが老犬を組み敷く光景や、アラビヤの少年の「被虐の悦びに光り震える」眼に象徴される、少年時代の肉慾の体験にある点は看過できない。例えば、Ⅷ章においてナチの秘密警察に加担した「私」がジャックに拷問を加える場面では、アラビヤの少年への加虐の記憶をそこに重ね、さらに自身の行為を「幻影」に対する復讐であると独白している。

私が踏みつけ、撲り、呪い、復讐しているのは、その少年、このジャックだけではなかった。それはすべての人間、幻影を抱いて生れ、幻影を抱いて死ぬ人間たちにないであった。(Ⅷ)

「私」は人間の内奥の暗黒を誤魔化し、覆い隠そうとする幻影の所有者たちを憎んでいるが、〈悪〉とは彼らへの復讐であり、幻影に対する真実を追求する手段となる。もともと、〈肉〉と〈悪〉の主題に関しては、後に遠藤文芸の初期作品が積み残した課題として「ほんとうの〈肉〉の問題、〈肉〉の孕む〈悪〉の問題が書ききれたか」(佐藤泰正氏)⁽⁵⁾という問題提起がなされており、また『白い人』の先行論においても両者の連関についての具体的考察は進んでいない。しかし、この作品において重要なのは、清教徒である母への密かな抵抗を抱く「私」が〈肉〉の目覚めを〈悪〉の行為へと増幅させていった過程である。そして〈肉〉とは、拷問者／被拷問者という関係性の基底をなし、

人間の深淵を行為として具体化するものとして、「私」を惹きつけるのだと考えられる。以上のことから、「私」における〈悪〉の意味づけと実行の過程を理解するには、肉慾の内実と、それが幻影への対抗手段であることの意味を明らかにすることが不可欠であろう。

本論は、人間の本能である肉慾の目覚めを契機に〈悪〉の問題が形成される過程、並びにその過程を回想し記録する「私」が立脚する現在において〈悪〉の可能性を追求する姿勢を確認していくことを目的とする。さらに、それらを踏まえて「私」、ジャック、マリイ・テレーズという「三角形」の関係性に注目し、閉塞状況の中で絶対を求める人間像と、彼らを「配置」する存在との「劇」の成立のあり方について検討していく。

二、〈悪〉の原体験としての〈肉〉の目覚め

『白い人』は、仏蘭西人として生まれ育ちながら独逸秘密警察に加担し、拷問者となった「私」の記録という形で構成されている。「私」における〈悪〉の態様と、〈悪〉の行為者であろうとする心性の根底にある疼きを理解するには、肉慾の体験がどのように反芻され、展開してきたかを語る「私」の認識を明らかにする必要がある。

幼年時代の回想を通して、「私」に拷問者としての生き方を選択させたものが提示されるなか、特に「私」の「悪の意志」が醸成されていく契機となった体験として位置づけられ、繰り返し蘇るのが、イボンヌが老犬を組み敷く光景である。「私」はプロテスタントの家庭で育ち、母の「きびしい禁慾主義」(Ⅰ)の下で肉慾に繋がる一切のものを排除されてきた。また、それと同時に、「右をみると言うのに、右だよ」「一生、娘たちにもてないよ。お前は」(Ⅰ)という否定的言辞をぶつけられることによって父を憎み、斜視の容貌の醜さを意識の中に強く刻印されていた「私」は、自己においても他者に対しても、肉体の存在性の実感が希薄なままに成長してきたと言える。

そのような「私」にとつて、「肺病やみの老犬の首を押えつけたイボンスのむっちりした膝がしら」を目撃したことは、現実感の獲得を情慾という生得的な衝動の形で味わったという意味で、忘れ得ぬ体験として受けとめられたであらうと考えられる。

しかしその行為は、窓からそれを覗いていた十二歳の少年の生涯に決定的な痕跡を残した。私はふるえながら、一切をみていた。しかし、それは恐怖のためではない。可哀想な母が息子に強い純潔主義ビュリタニスムの厚い城壁が、その日、音をたてて崩れたのである。私とその時味わったのは、情慾の悦びである。(略) 私の肉慾の目覚めは虐待の快楽を伴って、開花したのである。(I)

このことを契機に、「私」は加虐者と被虐者という関係性のあることと、それが情慾という肉体的感覚の実感を喚起するものであることを次第に理解する。すなわち、この場面における「情慾の悦び」とは、極端な純潔主義を強いられ「肉」としての自己認識を欠いていた「私」が、虐待による「悪」との遭遇によって、自身の「肉」と魂を遮断する障壁を突如として取り払われたために、強い印象をもって感受されたものと言えよう。また、この回想の後で、清教徒である「母へのコンプレックス」が語られていることから、「私」の「肉」への慾求は、単に肉体というレベルを超え、自己存在の根源への眼差しを胚胎させていったと考えられる。支配／被支配の関係性は、虐待・拷問という具体的行為によって、快楽とともに肉体の存在や生感覚を実感させるものであり、加虐行為が存在する限りその関係性が揺らぐことはない。人間にとつて否定しがたい本能である「肉」に基づく「悪」は、その存在の確かさによって「私」を捉え、後の幻影に対する抵抗と結びついていくのである。

ただし、十二歳の「私」にそこまでの明確な認識があるはずもなく、イボンスと老犬の光景は、一度は意識の底に後退し「灰の下に埋もれ」ていた。しかし、それを光景の記憶から「私」自身の行為へと具現化することとなったアラビヤの少年に対する加虐の体験は、その変容を象徴するように鮮烈な色彩と存在感を伴って記憶されている。

私は彼に囁いた。なにを言ったのか覚えてはおらぬ。口はカラカラに乾いていた。少年は私の腕に押されたまま、岩石のうしろの秘密の影のなかに倒れた。

……海は真青だった。海から吹きつける熱風を私はあらあらしく吸いこんだ。私は太陽をみた。それはやはり鋭い白い円盤のように静止していた。(略)しかし、私は痺れた記憶のなかで、私にからまれながら、あのアラビヤの少年の眼が被虐の悦びに光り震えていたのをハッキリと思い出すことが出来た……。(Ⅱ)

この烈しい肉慾に裏づけられた加虐行為の実行とそこから来る快楽は、以後の「私」が、対象そのものの真実の姿を直視しようとせず、実態を伴わぬ空虚な理想を語りそこに「酔う」人々を、〈悪〉の現実感の対極にあるものと見做し、反発する心性を形作つたと考えられる。下野孝文氏は、「私」が幻影の嫌悪のうちに見ている「酔う」人々の心性を、次のように解釈している。

精神の支柱たるべき存在が、慣習化し、日常の一つの様式に陥っている。彼らは、基督さえも拷問の構図から逃れられなかった、つまり現実の「悪」に飲み込まれていったことに目を向けようとしない。だからこそ、今在る「悪」とも向き合い対峙することがない。「悪」の存在と善の論理との現実的な矛盾や距離など、計量することもないマデニエに象徴されるように、彼らも、それは措いたままに、「幻影」のなかで辻褄を合わせ事を済ませようとする。それゆえに、「幻影」は、「私」には現実を糊塗し具体的な応えを先送りするための機構メカニズムとしか映らない。⁽⁶⁾

〈悪〉の何たるかに向き合わぬまま「人間の善や徳」について説いたところで、それは偽善であり、「私」の言う「幻影」に過ぎない。講義をするマデニエの「充ち足りた顔が非常にイヤだった」(Ⅱ)という「私」は、少年時代に「きびしい禁慾主義」によって「周囲のものが私に描いている影像」イマジネーションを生きてきたことへの抵抗ゆえに、観念的な善の中に自己を埋没させる生き方に嫌悪を感じていると考えられる。「私」にとって〈肉〉を否定することは、人

間のうちに消しがたく存在する〈悪〉を認めぬことと同義であり、ひいては真実を覆い隠すものである。そして、そのような志向性を持つ「私」が求める真実とは、〈肉〉としての自己認識に立った現実との闘いのうえに顕現してくるもの、自身の行為によって獲得すべきものだと言えよう。こうして〈肉〉という本能の目覚めによって形成されてきた〈悪〉は、「幻影」への反発を経由することで、意志と行為という主体性を帯びていくのである。

もちろん、「私」に萌芽した主体性は、観念的な言辞を弄し〈肉〉に象徴される現実を一顧だにしない人々への嫌悪によって展開していくのであり、神の存在に対する希求へとそのまま結びついていくことはない。だが、やがて既成概念として与えられた禁欲主義への反動として、本能による存在の確実性を持った〈悪〉の実行へと向かっていく「私」のありようは、それに対抗し得る不変かつ絶対の存在への志向性を内包するものと意味づけられるのである。

三、レジスタンスとしての肉慾

二章では「私」における〈悪〉の衝動が形成される過程を確認したが、ここで重要になるのが、「記録」によって過去を回想する私が自身の肉慾と〈悪〉の目覚めを振り返るとき、そこに「フロイト流に言えば、こうしたサディズムは子供の母にたいするコンプレックスによると言う」（Ⅰ）という心理学の理論を想定していることである。続けて「私」は「もし、その理論通りならば、私は自分をきびしく教育した母を心ひそかに憎んでいたのではあるまいか」と考えたうえで、

私はたんに女性にむかっただけのみ、自分の加虐本能を感じたのではない。女性のみならず、すべての人間、大袈裟にいうならばすべての人類を苛みたいという慾望を私は後年、感じだったのである。（Ⅰ）

と、自身の加虐行為の根底にあるものを語っている。「私」にとつての母とは、放蕩する夫に対する反動による「き

びしい禁慾主義」の象徴であり、「肉慾の目覚め」を恐れるあまり「子供としての悦びや自由」さえ規制し排除しようとする存在であった。母の信仰は、自己のありのままの姿を認めぬものとして幼い「私」に受け止められたのであり、それゆえに、母とは対照的に〈悪〉の実現に徹するという「私」の行為は、母による抑圧から逃れ、奪われた自由を回復したいという慾求を胚胎するものであると考えられる。つまり、「私」における〈肉〉と〈悪〉の問題とは、自身の存在の実感と、その存在の根拠を証するともに支配する母への抵抗とが絡み合うものであると言える。本来、肉体的にも密接な関係にあるはずの母によって〈肉〉としての自己存在の実感を阻害されるという体験は、「私」のうちに葛藤を生み、それに抵抗し逃れ出ようとする衝動が〈肉〉を介した〈悪〉を志向、増幅させていったのである。

また、母に代表される「きびしい禁慾主義」の世界は、人間の肉体と慾望を〈悪〉と見做す点において現実否定に繋がるものであった。そのような意味で、青年となった「私」が、現在の自分を作り上げたものとしてジャンセニスムの考え方の影響を挙げている箇所は、「私」の〈悪〉の形成過程に大きく関わるものとして注目される。

私はここで、ジャンセニスムの書物をよんで暮した。幼年時代から、私を、ともかくも形成したこの思想をみなおしなかったのだ。そこに関心があつたのは、人間は原罪によって歪められているということだけだ。人間はいかに、もがいても悪の深淵に落ちていく。いかなる徳行も意志もわれわれを純化するに足るものではない。ジャンセニスムのこの考え方こそ、まさしく私の人間観を裏づけるものだ。(Ⅶ)

「私」は認識のうえでは、清教徒であった母に対する反抗ゆえに、原罪に赦しを与える神の絶対恩寵をあえて問題とせず、人間という現実的存在が内包する「悪の深淵」の闇に惹かれていった。なお、この引用の箇所は「近代文学」の初出稿においては、小嶋洋輔氏⁷⁾が指摘したように、

たゞ、私は、ポール、ロワイヤルの師たちの思索から、神の恩寵信頼の部分だけは抜きとつておいた。私に關心

があつたのは、人間は原罪によつて歪められているということだけだ。(註・傍線は引用者による)⁽⁸⁾

という一文が挿入されていた。定稿では、神の恩寵についての記述が削除されることによって、原罪の問題が強調されていることから明かなように、「私」における〈肉〉と〈悪〉への拘泥は、自身の弱さの直視と表裏をなすものであると言えよう。「原罪」による人間の救われがたさを認識する「私」は、加えて、幼年時代に父から受けた「右をみると言うのに……お前は一生、娘たちにもてないよ、全く」(Ⅲ)という言葉の後々まで繰り返し想起することと表されるように、自身の醜さの刻印とその傷跡を否定できぬものとして眼差しているのである。そして注意したいのは、幻影としての神への反動による〈悪〉の実現は、行為による存在の確実性の証明である一方で、人間の限界に對置される形で神の絶対性への希求を暗示するものとして機能すると思われる点である。

このことが表面化する契機となつたのが、神学生ジャックとの出会いであつた。女学生マリー・テレーズとモニックの会話を盗み聞きた「私」は、彼女らがジャックについて語る「みにくいからよ」「顔がみにくいから、求愛する勇氣もないから、神学校にはいったままでよ」(Ⅲ)という言葉によつて、自身の容貌を侮辱された記憶を刺激される。「私」が女学生たちの下着を引き裂いたのは、醜さの対極にある美しく穢れないものを心奥においては願ひながらそれが叶わず、破壊したいという衝動として表出されたためであると考えられるが、下着を裂く音によつて「アラビヤの少年の世界に引き戻」されたという「私」の認識は、肉体的醜さの呪縛と加虐・破壊の行為との關係性を示唆していると言えよう。遠藤は、極端なピュリタニズムにおける肉体への憎悪について、次のように説明している。

彼は自分の裡にある肉体、肉の愛、情慾をふりうごかす源に恐怖と憤怒を抱きつづけます。自分のなかのそれらのものを破壊し、扼殺する事が、彼の執念となるのです。(略)しかも、この行為は「純粹への執着」から生れるのです。他者や自分の肉体を呪詛し、それに鞭うち「破壊し、扼殺する」その意味で、極端なる肉体の蔑視者は殺人者(第一のピュリタニズム)か、自殺者(第二のピュリタニズム)かの運命に転落するのです。⁽⁹⁾

「私」の〈悪〉の志向は、肉体感覚の確実性を通した現実感獲得の欲求に基づいているが、己の肉体の醜さを自覚し、他者を苛もうとする点においては、自己否定による破壊衝動という矛盾を抱えてもいる。二つの相反する欲求に引き裂かれる「私」は、自身の内包する深淵を覗き込んでいるからこそ、そこに調和を与える絶対者を無意識に求めており、それが幻影の否定へと向かわせているのだと考えられる。

再び「私」とジャックの關係に返ると、「私」は、ジャックが自分の醜さを直視し徹底的に対決することなく、「自分にまで平気でウソをつける」(Ⅳ) 心性によって十字架を背負おうとしていると考え、嫌悪感を示している。それに対して、「私」自身は、

・「あんたが」と私は言った。「いくら十字架を背負ったって、人間は変らないぜ。悪は変らないよ」

・「俺はあんたのように、自分の顔のみにくさに酔ったりしないさ。十字架だ、なんだと叫ばないさ。そりや、俺だって女学生の下着を破ったりする弱さはあるだろう。しかし十字架の効用を俺は信じないからな」(Ⅳ)

と言うように、肉体という現実的存在が孕む〈悪〉の否認しがたさを理解し、「斜視の傷」と肉慾の罪を犯す「弱さ」から眼をそらすことができないために、幻影としての十字架を拒否するのだと考えられる。しかし、醜さを事実として受けとめ、そこから生ずる弱さを直視することとは、「私」自身は思い及ぶことはないものの、十字架の本当の意味を理解することでもある。人間の真実の姿に「ウソをつく」者としてジャックやマデニエを嫌悪する「私」が基督の世界を強く否定すればするほど、無意識の拘泥があらわとなり、その論理のうちに組み込まれていることが明らかとなっていくのである。

このことは、「私」がジャックとマリー・テレーズの姿を見に訪れた教会で基督像と対面し、そこから感じた「誘惑」に顕著に現れている。

私があらためて知ったのは基督の生涯が、拷問されて完成したということである。この男も流石に、拷問する

ものと拷問されるものから成りたっている世界をよけて生きることができなかったのだ。今日、幾億の信者たちは日曜ごとに、ポケットをチャラ、チャラといわせて、教会の門をくぐっていく。十字架の前にひざまずく。神父や牧師の説教をぼんやり聞く。しかし、彼等は目の前の十字架が語ろうとしていることに耳を傾けない。(略)(そうだろう、そうだろう)と、その基督像は私に囁いた。私は首をふった。基督は今私のもっともよろこびそうな部分から誘惑しかかってきているのだ。(Ⅶ)

十字架に釘づけにされた基督の生涯は、加虐という〈悪〉の行為の実現によって「私」の生き方と関係し、対になるものである。無神論を標榜し、反抗していた自分のあり方そのものが神の存在を肯定しているという逆説を基督像によって客観的に突きつけられた「私」は、「その手にのるものか」と呻き、動揺を隠すことができない。この反応は、「私」が、幻影に満足し疑問を抱くことのない信者たちにとっての神を拒絶するがゆえのものであり、その根底には、人間の本来の姿をあらわにすることによって幻影の世界を破壊する、真実性への強い希求が潜んでいると言えよう。しかし、「私」の〈悪〉は、幻影としての神の論理をさえ打ち砕くことができない。

内陣の、太い、つめたい石柱に、頬をあてて、私はいいような怒り、情けなさを感じた。それは彼等にたいしてというよりはこのマデニエやジャックの世界のなかで、ひとり生きている自分にたいしてであった……。

(Ⅶ)

「いいような怒り、情けなさ」とは、これまで自身の求めてきた真実が、結局は人間の作り上げた幻影のなかに包摂され、覆い隠されるものに過ぎないという現実と直面したことによって生じたものであると言えよう。つまり、「私」の〈悪〉は、本能である肉慾と結びついている点において人間の真実であるはずだが、それが抵抗のための手段以上のものとなっていないという意味では、神に対抗し両端をなすだけの實在感を持ち得ていないのであり、今、「私」はその存在の限界という内的危機に晒されているのである。

四、〈悪〉の実行と「眞実」への拘泥

自身の内面に形成されてきた〈悪〉の行為を実現するに当たり、その限界に直面した「私」であったが、そこで転換点となったのが、戦争の勃発と進行という外的かつ政治的要因の発生であった。Ⅱ章末において回想する「私」は、

もし、すべてが、そのままだったなら、私は周囲の者たちが抱いている影^{イマージュ}像に応じながら生きていったかもしれない。

しかし、戦争が起った。(Ⅱ)

と語っている。「私」の記録では、特に戦争が激化し始めたⅦ章以降、「ナチスのテロリズムの深謀」にある「非情さ、強さ」(Ⅶ)と、「私」の裡にあった拷問者としての心性が現実のなかで形を取りゆく過程が重ねて語られているのである。

作品の語りのありようを併せて考えると、〈悪〉の衝動を内包する「私」の心性と戦争や死は密接な関係にあり、秘密警察に加担する以前からの内奥の〈悪〉による葛藤が、ナチとの関わりによって行為として完成していったことを示していると考えられる。それは、ナチ軍がオランダとベルギーの国境を突破し、巴里が陥落することによって占領時代が訪れた頃から、「私」が何かを予感し始めている点からも明らかであろう。

待っていた。なにかが訪れてくるのを待っていた。

処刑、拷問、虐殺の日が近づいている。人間世界が、文明や進歩の仮面を剥いで、眞実の面貌を曝け出す日がやってくる。(Ⅶ)

その場に居合わせたために突然連行され「偶然が彼等に死をもたらす」という、ナチによって「熟慮され」た狩りこみの方法は、そこに何の理由もなく、個を無意味化するものであるだけに、人々を恐怖に陥れる。今井真理氏は、「遠藤周作の描く『悪』の世界はナチを舞台にすることによって、一層具体的に提示される」⁽⁴⁰⁾ことを指摘し、理由の無い死によって個人の精神や思想を奪い、感情を介在させぬまま無名化することを、ナチの〈悪〉の特徴の一つとして考える。ナチの狩りこみに遭遇し、「テロリズムの深謀」を知った「私」は、その政治的意図を借りて、幻影を剥ぎ取り人間の真実の姿をあらわにする確かな〈悪〉の行為を見出していくが、そこに通底しているものを具体的に示す必要があるだろう。

「私」は人間の醜さ、卑怯さをあらわにする〈悪〉から眼をそらしたまま神を求める人々の姿勢を、幻影として嫌悪している。そのような「私」がナチに加担し、その方法を利用したのは、〈悪〉にまつわる内奥の葛藤を解消するためであったと考えられる。抗独運動の高まりに合わせてユダヤ人が処刑されるようになったことに気づいた「私」は、仏蘭西人が処刑されたユダヤ的血統をもつ同胞を「裏切り見捨て」、「ナチは、こうして、仏蘭西人の卑怯な自己保全本能を利用し、彼等を分裂させることを企てた」と理解し、誰もいない街の風景に「真実」と「感動」を見出していく。

このことに気づいた日から、私は好んで、夕暮、リヨンの街におりていった。夕陽が、生けるもの一つない大道路を赤くそめている。(略)けれども、その血でそめられたように赤い、だれもない、一本のアスファルト路、その荒野や砂漠のような風景は私を感動させた。私は真実をそこにみたような気がした。(Ⅶ)

人間の脆さ、弱さを非情に見つめ、利用するナチの方法は、個を剥奪し〈肉〉としての人間存在をあらわにしようとする点において、「私」にとつての真実に重ねられているのである。すでに述べたように、「私」は基督像を通して無意識に自身の醜さと弱さに応える真実の存在を求めているが、それと同時に拷問という〈悪〉の行為が人間世界の

「真実の面貌を曝けだす」ものであるとも意味づけている。この「真実」についての神と人間に対する二つの意味づけは、「私」が〈悪〉をなす自己を徹底させることでその対極にある存在をもまた認めていることを暗示していると言えよう。

しかし、「私」自身はこのような内面の動きを自覚しておらず、〈悪〉の存在の確実性の方向にのみ真実を求めている。そのなかで私が注目したのが、拷問者の一人、キャバンヌであった。

アレクサンドルと違い、キャバンヌが陶醉しないためだろうか。仏蘭西人に生れながらも、仏蘭西を裏切り、といつて、独逸人にもなりえないノケ者の影が、その蒼白なやせた顔をえぐりとついていた。拷問のにぶい音をききながら、私は屢々、キャバンヌが相手だけでなく、自分を撲っているのだと考えた。他人からだけではない。自分でも自分を呪わねばならぬ運命が、たしかにこの男を歪めていた。(Ⅷ)

「私」がキャバンヌの姿に見て取るのは、仏蘭西と独逸という対立関係のいずれにも所属し得ない荒涼とした内面と、そのような自身に対する密かな葛藤である。そしてこれは、「私」自身の抱える問題でもあるだろう。仏蘭西人と独逸人の間に生まれた「私」は、さらに放蕩家の父と清教徒の母の影響によって、幻影としての神に抵抗するために悪の深淵に惹かれるという形で、自己を引き裂かれる感覚のうちに生きてきた。両親によって容貌の醜さと肉慾への罪障感を植えつけられてきた「私」は、己を呪う反面、分裂状態に秩序を与える存在を希求してきたのである。そのような過去を持つ「私」にとって、戦争やナチズムとは、拷問を必然化し、死の恐怖を身近に感じることで人間の本質を剥き出しにするものであった。つまり、戦争が「私」の転機となったのは、周囲からお仕着せられた「影像」を打破し、確かな存在と対峙すべき自己のありようを獲得する契機と映ったためであると考えられる。

しかし、中尉や秘密警察や抗独運動者がいかに私の身辺を詳細洩れなく調べあげても、彼等は私の過去の思い出を、私を育てたもの、イボンヌと老犬の光景、アデンの少年との事件を知ることとはできない。そこに、中尉、ア

レクサンドル、キャバンヌさえも私から奪うことの出来ぬもの、私と本質的に違うものがあつたのだ。(Ⅷ)

「私」の〈悪〉の行為の中核をなす神の論理への抵抗と〈肉〉の記憶は、そこに行為が存在する限り決して消えず、他者から奪われることもない。この箇所は、大平剛氏が「ここにいたつては秘密が「私」の存在理由そのものとして機能していることが明白に表現されている。秘密を持つことによって「私」は世界を優位に「見る」ことの出来る立場に立つのである」^①と指摘するように、「私」を形成してきた「秘密」そのものが「私」を他から差別化し、固有化する役割を担っていると考えられる。「私がジャックを拷問する姿勢は風のように残る」という「不変の人間姿勢」(Ⅷ)を信じる「私」は、ジャックを責め苛むことによつて幻影の世界を破壊すると共に、拷問という行為の完成を通じて、無意識に絶対なるものとの対峙を果たそうとしている。そして同時に、〈肉〉と〈悪〉の相関を「秘密」として認識し、他の拷問者と自身の間にある越えられぬものを「記録」のうちに書き残そうとする「私」は、自身の〈悪〉の行為のうちに絶対と対抗し得る永遠性を求めているのである。

五、「記録」する「私」の希求

「私」は〈肉〉という本能に裏付けられた拷問者／被拷問者の関係の必然性と、それを計算し利用したナチの〈悪〉の確かな論理性を信じている。だが、その意に反して、「私」の行為が幻影としての基督に対する憎しみに根ざしている以上、〈悪〉の不変を訴えることは、それに対抗すべき烈しさで神の絶対性の証明に対する慾求を内包していることを意味するのである。この二重性は「私」自身も密かに認識するところであり、それはジャックを拷問する場面において、次のように吐露されている。

ふしぎに私は一方ではジャックが絶叫するのを待ちながら他方では、耐えろ、耐えろと念じていた。だがもし彼

が拷問に屈し中尉の囁いた低い声が甘くやさしく問いつめるままに、リヨン第六区の他の連絡員の名を言ったならば、私は勝つ筈だ。人間はやはり信じられぬ。人間は自己の肉体の苦痛の前にはやはり、すべての人類への友情、信義をも裏切る弱い、もろい存在である。(Ⅷ)

「私」の認識としては、「弱い、もろい」人間の真実の姿を強調するレベルにとどまっているが、その弱さ脆さを超えるものとして、ジャックが拷問に耐える可能性にたとえわずかでも望みを託そうとする「私」は、〈悪〉に對抗し得るものの存在を心奥では期待していると言える。つまり、〈悪〉の行為を刻印しようとする「私」は、その対極にある神を逆説的に証明することとは、まったく方向性を異にしながら、その絶対性への希求の強さにおいては同種のエネルギーを秘めているのである。そのことを看取したジャックは、「私」の陶酔を指摘している。

「しかし君だつて」ジャックは突然ひきつった声で叫んだ。「君だつて悪に陶酔しているじゃないか。信じているじゃないか」

「悪は変らないさ」

ジャックの手は、裂けた修道服の間をまさぐっていた。「変わる部分はない」と私は大声で叫んだ。細い白い彼の指のあいだから、私は、銀色の金属が、キラキラと光るのを見た。それは十字架だった。(Ⅷ)

拷問のなか十字架を手放すまいとするジャックと、〈悪〉を通して絶対的存在に拘泥する「私」は、その志向性において両極の関係にありつつも、拷問者／被拷問者という関係性のなかでそれぞれに極限を突き詰め、絶対なるものの顕現を求めようとする姿勢のなかには通底するものがあると考えられる。それは、マリー・テレーズを犯す「私」の衝動が「今、凌辱し、汚すのはすべての処女、その処女の純白さ、無垢の幻影であった」(Ⅸ)と語られるように、〈肉〉を介した〈悪〉の行為は、純粹への執着による幻影の破壊という行動原理に基づいている点からも明らかである。

しかし、すでに述べたように、「私」の〈悪〉が観念的な神を能動的に否定するためのものである以上、それはあくまで抵抗という手段に過ぎず、存在そのものとしての〈悪〉の実現は成し遂げられていない。そのため、ジャックが自殺という形で神への裏切りに陥った結果、「私」は攻撃の対象を失い、その裏で密かに求めた絶対なる神の存在証明も挫折してしまう。さらに凌辱され発狂したマリー・テレーズもまた、自らの意識において神への呼びかけをなし得ない状況にあり、彼ら三人は、〈白い人〉でありながら、純白の世界への希求を表明することも、そこに存在することもできない閉塞状況に置かれた人物であると見做すことができよう。

その閉塞的な関係性を表現しているのが、記録する「私」が、本来立場を異にしているジャックとマリー・テレーズの「運命とは別れたつもりでいた。彼等を棄てた気でいた」にもかかわらず、彼らと「私」という人間が互いに相結ぶ三角形が、次第に収縮していくのを感じた」(Ⅸ)と形容する視点である。加えて、ここで「私」が、その三者の背後に、人間としての限界を超えるもの、「私の意志をこえ」た存在を暗示している点は看過できない。

だが、このように、私たち三人をピンセットで実験台におき人形のように賭を強いたのは私ではない。決して私ではない。私でないとなれば、それは……。 (Ⅸ)

過去の認識と行為において、神の存在は近く捉えられるものではないとしても、記録を綴る現在、このように自問しつつ書き記す「私」は、自らが置かれている状況と行為を異なる次元から眼差すものを感じるだけでなく、内奥に呼びかけるものとして理解しようとしているのである。

この作中人物の主観を超えた眼差しを示唆するのが、「蠅」の描写であると考えられる。蠅の役割については、「音や蠅として」「基督の眼のイメージ」が使われている(池内輝雄氏)⁽¹²⁾「私」の悪の行為を見ている蠅の眼に神の視点、キリストの視点を託している」(武田秀美氏)⁽¹³⁾といった指摘にあるように、神や基督の眼を象徴するという論を中心にさまざまな解釈が提示されてきた。しかし、この作品が「私」の記録として語り出されている点を考慮すると、蠅

を描く「私」が、自らの語りのうちに神の存在を意識的に暗示しようとしているとは見做しがたい。ここではむしろ、蠅が、ジャックやマリイ・テレーズとの関係を回想している「私」の思念を破るもの、「私」の語りに支配されぬ領域として存在していることを重視すべきであろう。

蠅はまた飛び上った。しかし今度はシャンデリアの方にはむかわずに、その映像の反射している窓硝子に体をぶつけ、腹だたしげに駆けずりまわった。

突然、私は、その窓硝子に、さきほどのジャックの銀色の十字架を、その幻をみたような気がした。私が描いた三角形に、なぜか、計量し足らぬ一点があるような気がした。(IX)

「私」はナチの〈悪〉を、計算し尽され、確かな論理性を備えたものと考え、ジャックとマリイ・テレーズを引き入れたが、ここに来て、〈悪〉の徹底に欠如するもの、一点の違和を覚えていた。蠅を神そのものの象徴とまで言うことはできないが、ここでは「私」のうちに生じた違和感と、記録のなかに蠅を書き留める「私」の姿勢が重要であり、拷問者／被拷問者の関係性の限界に直面した「私」は、閉塞状況に置かれた人間を超越し俯瞰する、背後からの絶対的な眼差しを感じていると言えよう。

ただし、記録される過去の「私」は、神への求めを内包しつつも、あくまでジャックとの対立関係を通した〈悪〉の存在証明がジャックの自殺により中絶してしまったことに動揺する地点にとどまっており、その認識のレベルの違いを踏まえておくべきである。

(お前は自殺によつて俺から脱れたつもりなんだろ。(略)だが、それがなんだ。お前は俺を消すことはできない。俺は今だつてここに存在しているよ。俺がかりに悪そのものならば、お前の自殺にかかわらず、悪は存在しつづける。俺を破壊しない限り、お前の死は意味がない。意味がない)(IX)

自己すなわち〈悪〉の不変を繰り返す「私」であるが、そこにはかつて「真実」を求めたときのような確信も〈肉〉

の官能も感じられない。絶対なるものに肉薄するうえで不可欠な存在であつた被拷問者としてのジャックを欠いた「私」の感情は、「ジャックをながいこと愛しつづけ、その愛に裏切られ、喪つたような気持」から「しずかな腹だたしさ」が次第に荒れはじめ、「疲れ」へとめまぐるしく変化し、その動揺の激しさを窺わせる。「意味がない」という言葉の繰り返しは、ジャックを神の側の論理から外れる形で喪い両者の拮抗が崩れた今、反復することで自己の〈悪〉の存在を確認し保つしかない、存在の揺らぎを実感するものと言えよう。

そのような意味で、回想される過去の時間の最終部分であるIX章の時点において「非常に、非常に疲れていた。肉体の疲労だけではないらしかつた。もう、なにも私を動かさなかつた」と語る「私」が、作品冒頭の記録を書き起す時間では再び生への意志を語るということは、記録が真の〈悪〉に対抗し得る存在を認識し、自らのうちに再現する行為となつてゐるためであると考えられる。

私は生きねばならぬ。第一、歴史が、この私を、いや私の裡の拷問者を地上から消すことは絶対にできないのだ。その事実を私はこの記録にしたためたいのである。(I)

宮坂覺氏は、「私」に揺さぶりをかけ危機的状況に陥らせると同時に、〈悪〉としての意志を成立させる絶対的存在の働きを、記録との関わりにおいて次のように指摘している。

清教徒たる母への反抗から出発しても、彼は神学生ジャックのうちに潜む何物かに脅かされている。(記録)は、まさに得体の知れない何物かに押し出されて書いている。自分のうちにある〈悪〉を書き留めるのでなく、結果的にその何物かを描くことになつたのである。⁽¹⁴⁾

「私」は自身のうちにある神への希求を肯定することではなく、その行為は幻影への抵抗の段階にとどまつている。しかし、拷問者としての姿勢を記録として残さずにいられない「私」は、人間の「真実」を剔抉する慾求を所有する点において、その深淵を照射する神の眼差しと無縁ではあり得ないと言えよう。

そして、神の応答は、記録される作中人物の置かれた時間において感知されるものではないが、それを切望する人間像は、〈悪〉の対極にあるべきものを反映する形で、閉塞状況の中にも描きこまれていると考えられる。例えば、「私」がジャックの自殺を知った後、深い「疲れ」と「無感動」の中でマリー・テレーズの唄を耳にする場面である。私は非常に、非常に疲れていた。肉体の疲労だけではないらしかった。もう、なにも私を動かさなかった。

薔薇のはなは、若いうち

つまねば

洞み、色、あせる……

唄はどこかで聞いたことがあった。ああ、あれはリヨン大学の入学式の日だったな。しかしそれも、もう意味がない。(気が狂ったな。マリー・テレーズは気が狂ったよ) 私は彼女の歌声をききながら考えた。だがそれにも無感動だった。(IX)

狂気のなかの歌声は、マリー・テレーズの認識において発されたものではなく、「私」によって「しかしそれも、もう意味がない」と諦念のうちに受け止められる。だがその一方で、この場面での「意味がない」という言葉は、神の絶対性を遠望しているからこそ〈悪〉の行為を徹底しようとしたにもかかわらず、結果として自己と神の恩寵との間に超えがたい距離を感じるほかない「私」の思いを吐露したものと考えられる。「私」とマリー・テレーズの置かれた状況を考えると、この唄は、今は手の届かぬ聖らかなもの、美しいものへの痛切さと憧憬を表すものであると解釈できよう。そして、この場面を「記録」として再現する「私」の行為は、神の存在の絶対性を求めているなければ成立し得ないものであり、だからこそ作品冒頭の「私」は、いまだ〈悪〉の行為者として対峙していこうという意志を保

持しているのである。

『白い人』の主人公が、「幻影」としての神の論理に抵抗する形で〈悪〉の行為者たろうとすると神の絶対性に対する希求を潜在させているという構図は、やや観念的な印象を与えるという評価は否定できない。しかし、〈悪〉を実現しようとする過去の「私」、回想し書き綴る現在の「私」、そして人間の意志を超えた存在という三つの眼差しが入れ子構造をなす記録によって語り出される作品世界は、人間の意志と神の恩寵が相結ぶ可能性を示唆するものとなっていると言えよう。

註

- (1) 遠藤周作「感想」(『文藝春秋』第三十三卷第十七号 一九五五年九月 二八四頁)
- (2) 笹淵友一「現代日本文学とキリスト教」(『現代とキリスト教』A・マタイス、井上英治編 新教出版社 一九七三年四月 一〇八頁)
- (3) 武田友寿「最初の小説『白い人』『黄色い人』の世界」(『遠藤周作の文学』聖文舎 一九七五年九月 一九頁)
- (4) 三木サニア「『白い人』の世界——サド的造型とユダ的造型をめぐって」(『遠藤・辻の作品世界——美と信と愛のドラマ——』双文社出版 一九九三年十一月 二七頁／初出「方位」第五号 一九八二年十一月)
- (5) 遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』(講談社文芸文庫 二〇〇六年七月 二〇一頁／初刊 春秋社 一九九一年十一月)
- (6) 下野孝文「『白い人』論——その背景と現実感——」(『作品論遠藤周作』笠井秋生・玉置邦雄編 双文社出版 二〇〇〇年一月 二七頁)
- (7) 小嶋洋輔「遠藤周作の留学——『白い人』に描かれたフランス——」(『遠藤周作研究』第五号 二〇一二年九月 八〇頁)
- (8) 遠藤周作『白い人』(下) (『近代文学』一九五五年六月 六一頁)
- (9) 遠藤周作「カトリック作家の問題」(『遠藤周作文学全集 第十二巻』新潮社 二〇〇〇年四月 五〇頁／初出『カトリック作家の問題』早川書房 一九五四年七月)
- (10) 今井真理「『悪』のむこうにあるもの——遠藤周作論」(『三田文学』第八十巻第六十七号 二〇〇一年十二月 二二九頁)

- (11) 大平剛「『白い人』論」〔帯広大谷短期大学紀要〕第三十八号 二〇〇〇年十月 六〇頁
- (12) 池内輝雄「白い人・黄色い人」〔國文學 解釈と鑑賞〕第四十卷第七号 一九七五年六月 一三四頁
- (13) 武田秀美「『白い人』論——神不在の虚無——」〔星美学園短期大学研究論叢〕第三十四号 二〇〇二年三月 六一頁
- (14) 宮坂覺「『アデンまで』『黄色い人・白い人』」〔遠藤周作——その文学世界〕山形和美編 国研出版 一九九七年十二月 二八一—二九頁

* 本文の引用はすべて『遠藤周作文学全集 第六卷』（新潮社 一九九九年十月）に拠った。